

# 齋藤修一郎と英学②—大学南校から開成学校時代—

## (2) 南校・第一番中学時代

日本英学史学会本部例会第 534 回 2019 年 12 月 7 日

川瀬健一

### ●はじめに：

齋藤修一郎は、明治 3 年 3 月（1870 年 4 月）に旧幕府・静岡藩の西洋式学校・沼津兵学校付属小学校に留学し、ここで夏頃から英語の初歩を学び始めたが、10 月、福井藩選出の貢進生として東京の大学南校（後開成学校、後の東京大学）に学ぶこととなる。これは藩選出の貢進生 2 名の一人に選ばれたことを意味し、東京への転学は「藩命」であった。以後彼は、1875 年（明治 8 年）7 月に開成学校法科 1 年を終了した後に、8 月に日本を經ってアメリカ・ボストン大学法科学校に留学するまで、東京でアメリカ人やイギリス人の教師たちから英語で西洋の諸学を学んだ。しかしこの時期の学校はしばしば学校名やその制度的あり方が変化したためか（関東大震災で東大図書館が焼失したせいかな）、史料が散逸していて、その学習の実態はいまだ不明の部分が多い。

本報告は、少ない史料に依拠した先学たちの研究に基づき、東京大学に残された当時の史料で補足して<sup>1</sup>、齋藤修一郎が 5 年近くの年月東京の学校にて、どのようなことを学んだのかについての、概括的報告である。

内容が多岐に渡るので、第二回として「大学南校」の後身の、「南校」時代と「第一大学区第一番中学」の状況を報告する。

### 1：学校の再編

明治 4 年 7 月 18 日（1871 年 9 月 2 日）に、これまで文部行政を統括してきた「大学」が廃止されて文部省が設置されたことにより、「国立の学校」制度の改変が行われた。

文部省の設置に中心的働きをしたのは、佐賀出身の江藤新平で、文部卿となったのも、佐賀出身の大木喬任であり、文部省には、多くの洋学者が登用された。

・文部省設置の目的：a：洋学派と国学漢学派の対立の解消

b：洋学に基礎を置いた中央集権的教育制度の樹立による全国民教育体制の確立

### ●南校への再編

これに伴い「大学南校」は 7 月 21 日（9 月 5 日）に「南校」と名称変更がされ、9 月 25 日（11 月 7 日）には学校が一時閉鎖されるとともに、教育課程の改変と在学生の選別が行われ、明治 4 年 10 月 27 日（1871 年 12 月 9 日）学制改革の上、普通科として再開した。

<sup>1</sup> 基本史料である『文部省往復』は東京大学文書館サイトで全面公開されている。  
<https://www.u-tokyo.ac.jp/history/S0001.html>

- ・学校変革の要点：a：英・仏・独の三か国語による語学学校への改変。  
b：日本人教師が指導する「変則」を廃止。すべて欧米人教師が指導する「正則」に改変。

⇒この結果：a：計 970 名いた学生がふるい落とされ、500 人に絞られる。

(250 人を英学生、125 名を仏学生、125 名を独学生)

b：多くの日本人語学教師を解雇。

※「全部正則とした際に日本人教師 50 余を廃止」（文部省往復明治 4 年甲 219 帖）

この学校再編時に、齋藤修一郎は無事英学生として所属を許される。

○英学第 3 級に編入（「英文自伝」<sup>2</sup>による）。明治 4 年 9 月<sup>3</sup>。

○明治 5 年 4 から 8 月の南校名簿：英一に在籍（21 人）。

### ●第一大学区第一番中学への改称

明治 5 年 8 月 3 日（1872 年 9 月 5 日）に第一大学区第一番中学校に改称。

⇒明治 6 年 4 月（1873 年 4 月）まで。

※明治 5 年 8 月 3 日に「学制」が制定され、学区制が施行された。

この際には、学制は、上等中学（1 から 6 級）と下等中学（1 から 6 級）、予科（1・2 級）に改められた。改称直後の明治 5 年 8 月は南校のクラス・担当教師・使用教科書はそのままであったが、開成学校に改変される直前の明治 6 年 3 月には、それぞれのクラスの名簿は残っており、外国人教師の担当学科はわかるが、明治 5 年 8 月以降に開かれたクラス、たとえば英二級ではどんな教科書を使って教えたかは史料が皆無なので不明。

○齋藤は明治 6 年 3 月に「試験により、英上等中学三級より二級に進級」と、明治 6 年 3 月文部省雑誌 1 号にある。そして明治 6 年 3 月の「第一番中学一覧表」<sup>4</sup>では英学の最上級は二級。

つまり南校⇒第一番中学へ改変された際には、英 1 ⇒英 3 級、英 2 ⇒英 4 級、英 3 ⇒英 5 級、英 4 ⇒英 6 級とされ（以上上等中学）、英 5～9 は下等中学とされた。

### ●開成学校への改称と再編（詳しくは次回 「齋藤修一郎と英学②-3」にて）

その後英 1 級など最上級を近々終了する者が出る可能性から、専門学校設立が検討され、明治 6 年 4 月に開成学校と改称し、7 月には英学を法科・理科・工業学に再編し、仏学独学は英学への編入又は、仏学⇒諸芸学、独学⇒鉾山学に再編。下等中学 1 級以上のものは志願により各専門学科へ<sup>5</sup>。齋藤は法科へ編入。

<sup>2</sup> ラトガース大学のアレキサンダー図書館が所蔵する、グリフィス・コレクションの中の、Student Essays（生徒作文）319 編の第 20 編目の作品。署名は Edward。

<sup>3</sup> ただし病により一か月入院したため学業が遅れる（心臓の病）（「英文自伝」）。

<sup>4</sup> 国会図書館デジタルコレクション。http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812886

<sup>5</sup> 文部省往復明治 6 年乙 145 丁～。「第一大学区開成学校沿革調」による。

## 2：南校の日課：

明治4年11月に制定された「南校規則」によると以下の通り<sup>6</sup>。

### ●日課の事

第10条 夏は（春分より秋分まで）朝5時半 冬は六時半に起き、すぐに〇〇更衣し7時に朝食。終わって9時15分前までに当日課業の下稽古をする。

第11条 9時より12時まで講義。12時午餐。1時までは放課の時間。1時から3時まで講義。

第12条 3時から5時は歩行運動勝手次第。5時から6時は下稽古。6時から7時は夕飯。7時から9時は下稽古。9時放学。10時就寝。（ただし夏月大暑の節は3時より4時まで下稽古。4時より6時まで歩行の時間）。

### ●試業の事

第16条 1年4回。毎季の末において。そのうち土用休業前の一回は1年の内の大試業にして、局中諸長官の目前で行う。生徒等級の〇涉は必ずこの4回の試業の時に於いてし妄りに其の中間に昇降するを許さず。ただし非常に優劣あるときはこの限りに有らざる事。

第17条 校中の全科を卒業せし生徒は或いは官員に選まれてこれを实地に施し、或いは他の上等学校に転進し又はヨーロッパアメリカ等の大学校へ留学修行することを得べき才力の人とし、文部卿輔丞および其の局長の調〇したる証書を与えるべきこと。

### ●学資の事

第18条 1年およそ100両。そのうち1月食料4両2朱。月始めに給養局へ納める。

### ●休日の事

第19条 天長節 各月の朔日（1日）。日曜日

暑中休 土用入口より30日間

12月25日より正月10日まで。

また興味深いのは、南校寄宿舍における食事である。（資料1参照）

「南校規則」の「学資の事」にあるように、一か月の食費が4両2朱（約4万2千円）。かなり贅を盡したものであり、牛肉を給するために構内に屠牛場を設けて料理人自ら屠殺することを申し出ている<sup>7</sup>。

明治4年8月と9月のメニューを比較すると、9月にはパンが常食にはいり、洋風色が強まっていることが目につく。

学費が食費を含めて約100両（約100万円：月毎に10両）と高額のため、多くの学生が官費支給を申請した<sup>8</sup>。齋藤は官費で月十一円支給された。英一クラス21名中15名が

<sup>6</sup> 文部省往復明治4年甲142帖から抜粋。

<sup>7</sup> 明治4年11月23日。文部省往復明治4年甲p417。

<sup>8</sup> 廃藩置県も実施され（明治4年7月14日）、貢進生制度は廃止（明治4年9月25日）

官費支給。6名は私費。(資料2参照)

しかし明治5年9月には、この官費支給は「貸費」制度に改められ、その結果齋藤は五か年の支給と定まった<sup>9</sup>。

### 3：外国人教師の担当学課（英学）

■フルベッキ（米国）・ウェーダール（米国）・ハウス（米国）・ローヘル（英国）。メイシヨル（英国）・ホール（英国）・ホワイマルク（英国）。

※明治4年10月19日文部省への報告書（文部省往復明治4年乙 p24-26）

※明治4年10月19日以後加わった英学教師：グリフィス（明治5年1月採用）・スコット（明治4年8月採用）・ウィルソン（明治4年8月採用）。

※明治4年10月19日以後退職した英語教師：ローヘル（ローパーか？ Roper 4年11月解雇）

■南校の時間割：

明治5年4月制定の学科表が残される（資料3参照）<sup>10</sup>

- 英1・2・3：フルベッキ・グリフィス・ハウス・ウィーダー
- 英4：スコット
- 英5：ウィルソン
- 英6：ホワイマーク
- 英7：メイジャー
- 英8：ホール
- 英9：日本人教師のみ

#### ★英1の担当教師の担当学科

フルベッキ：代数学（英2では修身学も。英3では歴史・修身学）

グリフィス：生理学・化学・地理学・修身学・文学（英2・3は修身学を除く）

ハウス：讀方・文典・作文・歴史（英2同じ。英3は讀方・書取・作文・習字・文典）

ウィーダー：算術・幾何学・窮理学（英2同じ。英3は算術・窮理学）

★このうちハウスは、明治6年1月26日付で退職。ハウスの担当学科は誰が担当したか？  
ハウス退職に伴う補充の記録がある<sup>11</sup>。

「この代人として英人キーリングを2月1日から7月31日まで雇入れたが、同人は案外学力無く、3月8日までをもって御雇相止め。については米人ワイラルと申す者を一か

---

され、藩費留学生も廃止。南校は明治5年7月に学費給与制度を創設。学費給与を願出、試験の上適当と認められた学生には衣食住一切を南校が取り扱うこととした。（文部省往復明治5年甲481丁—489丁）

<sup>9</sup> 文部省往復明治5年乙番外18丁—26丁。

<sup>10</sup> 『東京帝国大学五十年史』1932年刊 上巻 p214～232 掲載

<sup>11</sup> 文部省往復明治6年甲309丁。明治六年三月二十九日 第一番中学より文部省への報告。

月二百円で3月21日より九月二十日まで六か月間代請けとして御雇入れ。」

このワイラルという教師は明治6年7月に開成学校と改変されたときの担当教師には見当たらない。すなわちこの人物も学力不十分で途中解雇か。したがってハウスの担当学科は他の三人もしくは他クラス担当の者で分担した可能性大<sup>12</sup>。

### ★英1担当教師の略歴

#### 1：フルベッキ：(当時41歳) Guido Fridolin Verbeck(1830-1898) 代数学担当

1830年1月23日。オランダ、ザイストに生まれる。1852年9月2日、オランダを離れ渡米。1854年夏に外国伝道を志し、1856年9月、ニューヨーク州オーバン神学校に入学(26才)。1859年3月に牧師に任命され、オランダ改革派教会に移籍。4月18日、マリア・マニョンと結婚。5月7日、日本に向けニューヨークを出港。11月7日、長崎上陸。以後、崇福寺にて多くの学生に英語を教授。1864年8月から幕府の教習所・済美館で英語を教え始める。1868年1月、長崎の佐賀藩校蕃学稽古所の教師となる。1869年2月新政府から学校設立の相談を受け3月東京に出発。4月、開成学校の語学・学術教師となる。1870年11月、大学南校の教頭。1873年9月、開成学校教頭を辞任。その間に欧米使節団構想を政府要人(大隈)に伝え、使節団が具体化した折にはその詳細について諮問を受ける(⇒岩倉使節団)。1873年12月位開成学校を退任して以後は、法律顧問として正院や元老院に勤務し、外国の法律の翻訳や多くの法律の草案作りに従事。1877年10月に元老院を去って後、元の宣教師に戻る。1898年3月、赤坂葵町の自宅で死去(68歳)。<sup>13</sup>

#### 2：グリフィス：(当時28歳) William Elliot Griffis(1843-1928) 生理学・化学・地理学・修身学・文学担当

1843年9月12日、アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィアに生まれる。1860年高校を中退し、第一オランダ改革派教会のバイブル・クラスで教え始める。南北戦争が始まった後、奴隷制度問題への強い関心からペンシルベニア士官候補生に志願し、1863年ペンシルベニア市民軍第44連隊の一員としてゲチスバークの戦いにも参加。1865年、ラトガース大学科学科に入学し1869年卒業。その間に日本人留学生、横井左平太・太平兄弟に英語を、日下部太郎(本名八木八十八)にラテン語を教授。明治4年(1871年)に日本に渡り、福井藩の藩校明新館で同年3月7日から翌年1月20日まで理科(化学と物理)を教えた。明治4年(1871年)7月、廃藩置県により契約者の福井藩が無くなった。明治5年(1872年)1月、フルベッキや由利公正らの要請により10ヶ月滞在した福井を離れて南校(東京大学の前身)に移り、明治7年(1874年)7月まで物理と化学、精神科学など教えた。明治8年(1875年)

<sup>12</sup> グリフィス日記の1873(明治6)年4月11日の項に Corrected 3rd class composition, (英の第3級クラスの作文を添削) という記述あり。グリフィス日記は1872.1.23～1874.9.17の東京時代の日記。「W.E.Griffis' Journal」。化学史家の蔵原三雪氏が翻刻したもの(武蔵丘短期大学紀要第12巻2004年・第13巻2005年に掲載)を使用。

<sup>13</sup> グリフィス著 村瀬寿代訳『日本のフルベッキ』2003年洋学堂書店刊、所収年表による。

帰国後は牧師となるが、米国社会に日本を紹介する文筆・講演活動を続けた。1876年にアメリカで刊行した *The Mikado's Empire* (『ミカドの帝国』あるいは『皇国』と訳される)は、第一部が日本の通史、第二部が滞在記となっている。1928年2月5日避寒先のフロリダ州ウインター・パークで死去(85歳)<sup>14</sup>。

### 3 : ハウス : (当時 35 歳) Edward Haward House(1836-1901) 読方・文典・作文・歴史担当

1836年10月5日にアメリカのボストンに生まれる。1850年から3年間、音楽の勉強をし、作曲もした。1854年、「ボストン・クリエール」紙の音楽・演劇の批評家となり、1858年には、「ニューヨーク・トリビューン」紙の記者となり、音楽と演劇の費批評を担当。1859年には、ジョン・ブラウン奴隷廃止運動の通信員として戦地に派遣され、南北戦争(1861-1865)に際しては、北部連合軍の通信人として活躍。この間の万延元(1860)年に江戸幕府が通商条約批准のため初めてアメリカに派遣した「遣米使節」の報道を通じ日本に興味を持ち、日本に同情的な評論を執筆。南北戦争後の3年間は、ロンドンとニューヨークで劇場の管理をしたが、1868年に再び「ニューヨーク・トリビューン」紙の記者となり、明治2(1869)年暮れに「ニューヨーク・トリビューン」紙の東京特派員として日本に派遣され、翌1870年には「ニューヨーク・タイムズ」の特派員も兼ねた。来日後、特派員の傍ら明治4年1月より大学南校で英語学・英文学教師となって教壇に立つ。この間明治5年に起きたマリア・ルス号事件では自国のデロング駐日公使を痛烈に批判し、これが原因でアメリカから抗議され、明治6年1月28日に持病を理由に満期解雇。明治政府の台湾出兵には従軍取材し、日本で新聞を発行し、折に触れアメリカで論文を発表し、通商条約にある治外法権や関税自主権の是正に付いて明治政府の立場を文筆をもって代弁するジャーナリストでもあった。1901年12月18日東京の自宅で死去(65歳)<sup>15</sup>。

### 4 : ヴィーダー : (47 歳) Peter Vrooman Veeder(1825-1896) 算術・幾何学・窮理学担当

1825年6月23日ニューヨーク州ロッテルダム生まれ。父は合衆国最初の大規模な鉄道を建設。1846年SchenectadyのUnion Collegeを首席で卒業。以後7年間各地で教師。1857年にピッツバーグのWestern Theological Seminaryで神学を学んで卒業。牧師となり、ニューヨーク州のKingsborough教会牧師、1857年カリフォルニア州サクラメント、1858年NapaのFirst Presbyterian Church牧師(1865年7月)。以後数年間サンフランシスコのCity College学長。1870年フィラデルフィアのCommissioner to the General Assembly。同時に神学博士授与。日本政府の招きを得て1871年から1878年まで東京で教える。帰国後は、1880年ピッツバーグのWestern Universityの数学教授、1882年イリノイ州のLake Forest

<sup>14</sup> 山下英一著『グリフィスと福井【増補改訂版】』2013年エクシート刊所収の年表による。

<sup>15</sup> 『近代文学研究叢書5』1957年昭和女子大学刊、所収の年譜などによる。

University の天文学教授などを務めた。

1896年8月11日バークレイの自宅で死去。日本における気象研究の先駆け<sup>16</sup>。

#### 4：南校の英学における学科と使用教科書

幸いにも南校が第一大学区第一番中学と改称された直後に、その当時の学科と使用教科書が調べられて文部省に報告されている<sup>17</sup>。(資料4を参照)

それぞれの教科書が特定できれば、各教科がどのような教習課程を経て、その教科の修得内容が修得に至ると考えられていたかが判明する。

##### ●明治5年4月制定の学科表との異同

英1～3：グリフィスが担当していた「文学」が無くなっている。

何をテキストとして「英文学」を講義していたのだろうか？

※文学作品は人間形成に大きな影響をあたえる。

##### ●歴史の教科書：

パーレー「万国史」<sup>18</sup> (英5：初歩・英4：アラビアの部・英3：ギリシャの部) ⇒ウーストル「英国の部」<sup>19</sup> (英2) ⇒ウィルソン「千五百年代」<sup>20</sup> (英1)。

第一番中学 (英3)：ウィルソン「千五百年代」⇒(英2)：ウィルソン「1600年代」？  
⇒(英1)：ウィルソン「1700年代」？⇒開成学校法科予科一年：『英国史』Hume's History of England<sup>21</sup>

※この歴史教科書の内容を検討していくと、歴史学習の過程がわかる。

※日本・中国の歴史(漢文)を基本教養としていた人にとって、西洋の歴史を学ぶことは、日本・中国を西洋を基準として相対化し、その価値観形成に大きな影響を与える。

---

<sup>16</sup> 『増訂 お雇い米国人科学教師』渡辺正雄著 北泉社刊 1996年による。

<sup>17</sup> 文部省往復明治5年甲243丁～265丁。

<sup>18</sup> パーレー万国史『Parley's Common School History of the World』初版1837年。項目：入門(1～5章) アジア(6～34章)・アフリカ(35～44章)・ヨーロッパ(45～151章)・アメリカ(152～167章)・オセアニア(162～178章)。全512頁(以上1837年の初版版)

<sup>19</sup> 誰のどのような書物なのかは不明。

<sup>20</sup> Marcius Willson 「OUTLINES OF HISTORY-geographical and hisutorical and maps」の「THE UNIVERSITY EDITION」1856年刊の第二部「MODERN HISTORY」の第三章「GENERAL HISTORY DURING SIXTEEMTE CENTURY」

1：序章

2：ヘンリー8世とチャールズ5世の時代

3：エリザベスの時代

4：同時代史

第一章：紀元後から西ローマ成立(AD476) 第二章：西ローマ成立からアメリカ大陸発見(AD1492) 第四章：17世紀 第五章：18世紀 第六章：19世紀(1852年まで)。

<sup>21</sup> 「グリフィス日記」1874(明治7)年2月2日の項の試験科目として。

### ●英作文の内容：

楠家重敏著『ジャパノロジーことはじめ—日本アジア協会の研究』（2017年晃洋書房刊）に、明治6年2月15日に、「日本アジア協会」例会で、「大学南校のハウスと五人の学生が再登場し、五人の学生は『琉球諸島の言葉に関する五つの論考』を読み上げた」との記事がある（p40）<sup>22</sup>。

この発表は本来は前年の明治5年12月14日の例会でグリフィスの「江戸の街路とその名称」との公演に続いて発表される予定であったが、グリフィス講演に関する討論が長引いたので、ハウスがその要旨を解説しただけで終わったものであった（同書p35-36）。

発表された明治6年2月15日ではすでにハウスは東京第一番中学を退職したあとである。本来の発表日の明治5年12月14日なら彼の在職中である。

ハウスは英1～3のクラスの作文を担当していたのだから、その中で生徒に課題を与えて英作文を書かせていたのではないか。「琉球諸島の言葉に関する五つの論考」はその成果の一つであったのだろう。残念ながら執筆した五人の学生は不明である<sup>23</sup>。

このハウスを引き継いで、第一番中学の英3クラスの英作文を担当したグリフィスの下には、多くの学生の英作文が残されている<sup>24</sup>。

この英作文で筆写名が特定できたものは83名。その中に数名開成学校時代の理学予科一級で教えた生徒の名が確認されるが、その他の者は大部分、南校・第一番中学時代の英1～3の生徒である。したがってグリフィスは、英作文を担当していたハウスが明治6年1月に学校を去って後には、英1～3の英作文を担当し、開成学校に再編されてからも、いくつかの科の「翻訳」を担当していたとみられる。理学（本科第四級・予科第一級）<sup>25</sup>は語学を担当していたので翻訳も担当した可能性は高い。

ハウスを引き継いだグリフィスが、生徒に課題を与えて英作文を書かせていたのだから、これはハウスが在任中に行っていたことを引き継いだ可能性が高い。

---

<sup>22</sup> 正しくは大学南校ではなく、第一番中学である。そして日付もグリフィスの日記によれば2月16日土曜日で、また読み上げたのは、グリフィス日記ではハウスである。前年の発表予定日もグリフィス日記では12月15日である。

<sup>23</sup> グリフィス日記ではこの学生を「1st class scholars」と記す。第一番中学の英語最上級クラスということだ。最上級は当時は英3なので明治5年8月の南校名簿英1在籍21名の中の5人であろう。だが、琉球語を知っている可能性のある薩摩出身学生は英1のクラスには一人もいない。

<sup>24</sup> ラトガース大学の図書館が所蔵する、グリフィス・コレクションの中の、Student Essays（生徒作文）319編。確認したところ、83名の生徒の記名がある作文が含まれており、その内の自伝はEdwardのものを含めて27編。そのうち日本名の記名があるものが14編。英語の変名の記名があるものは3編。無記名が10編。319編には幾つかのテーマがあり、グリフィスが与えたテーマを生徒が選んで書いたものと推定される。その中には、「アイヌ」「アート」「自伝」「子供の遊び」「夢」「昔話」「外国人—初期の印象」「歴史叙述」やさまざまな日本の文化や生活習慣についてのテーマが含まれ、明治初期のエリートの若者の人生観や知識などを知る興味深い資料である。

<sup>25</sup> 「文部省雑誌」明治6年第3号。